
夢才チ

fluorite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢才チ

【Nコード】

N8064J

【作者名】

flurrite

【あらすじ】

夢才チでなんか書くことと思ったら訳がわからなくなった

そこは白かった。真つ白な世界だった。かといって目を差すような眩しさはなかった。周りには何も無かった。ふと横を見るとそこには人がいた。肩にかかる長さの髪、女の子のようだった。彼女の白い肌と白い服は、ほとんど周りに溶け込んでいるようだった。ただ彼女の艶やかな黒髪と周囲とのコントラストがとても美しかった。彼女は一步一步こちらに向かって来ているようだった。色白な裸足の、床を歩く音が聞こえる気がした。

気がつけば、自分の目の前まで来ていた。彼女はたと止まり、右手を突き出して僕の左手を掴む。彼女は振り向くと、僕の手を引っ張った。ゆっくりと、彼女に引つ張られて歩いていく。周囲の風景は白色、ずっと一定だった。僕は自分が進んでいるのかどうかよく分からなかった。ただただ感覚の無いまま、彼女に導かれていく。すると彼女は止まった。僕は不安になる。彼女の手から緊張が伝わってくる気がした。

彼女はヒョイと飛んだ。僕も彼女に引つ張られていく。強く引つ張られると、僕の体も浮いていた。ゆったりと降下していくのが感じられる。全身が緊張していた。彼女の表情を見ようと思ったが、体は思うようには言う事を聞かない。僕は目を瞑って流れるままに身を任せた。

唐突に生温い風を感じ、それと共に明るいオレンジ色の光を感じた。ゆっくりと目を開ければ、水平線すれすれに太陽があった。眼下には海岸線の岩肌がゴツゴツしていた。ちよつとびっくりしてしまふような高さを飛んでいた。彼女に連れられ、ゆっくりと降下してゆく。無重力の独特な感覚は、それほど苦にならなかった。波音が近

づいてきた。

岩場に降り立った。ねっとりとした潮風に彼女の髪がなびく。彼女は丁度すわりいい場所を見つけて、そこに腰をかけた。僕の方は、なんとも手持ち無沙汰であり、座らずに背後の岸壁にもたれかかっていた。海は岩にあたっては砕け、大きな音をならしていた。

丁度真向かいに来ている太陽を眺める。じっくり見ていくと、沈んでいくのが分かった。1/4が沈んだ。こちら側の空から夜が押し寄せてくる。昼と夜の間の中は、空では無いような気がした。半分が沈む。彼女はその場所にまだ座っていた。暗さも増していた。空気中に見えない物質が紛れ込んだようだ。波の音に身を任せ、目を瞑る。そつと、そのままにしていると、頭の中はすっかり空っぽで、何もかもがはつきりしていた。

もうずいぶんたった気がした。目を開けると、夕日は水平線から一筋の光を見せるのみであった。3・2・1……。夜が訪れた。

(後書き)

ハハツワロス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8064j/>

夢才子

2011年1月27日04時38分発行